しあわせ

7月号

罪の軽重（きょうじゅう）をいはず、ただ念仏だにも
申せば往生するなり、別の様（よう）なし。
（法然聖人）

「手を合わす母」

光陰矢の如し。いよいよ今年も後半に入った。私などとっくに人生の折り返しを過ぎて、折り返しどころか、終点に近づいた。

耳の奥に「次は終点」というアナウンスが聞こえてくる。「次は終点、次は終点」と。

しかし、人生の終点は近づいても無限に広がる光輝く世界が待っている。往生、生まれ往く世界、そして生き往く世界が開かれている。いや、すでに無明長夜の闇が破られ、あふれ輝く光にこの身を包まれている。

“一寸先は闇”の人生。その闇も光に合うと一瞬にして消えてゆく。光は闇を破る。

「無始よりこのかた、ないし今日今時に至るまで」闇の中を流転してきたこの命にみ仏の光が差し込んで、輝きに満ちた世界が開かれてくる。

闇は光によって一瞬にして破られる。不平・不満・愚痴・怒りに満ちた娑婆の真っ只中で不思議な安らぎがにじみ出てくる。光の仏様の魔法のすごさである。

法座案内

＜広島聞熏会　ー仏弟子に学ぶー＞
七月　三日（水）午後二時～
講師　内藤昭文和上
会費　一〇〇〇円

＜盆会法要＞
八月　十一日（金）昼席・夜席
十二日（土）昼席
講師　海谷　真之　師
（江田島市　光源寺住職）

＜法味の会＞
七月・八月はお休みします

府中町山田二丁目二ー五十三
栢原山　龍仙寺
電話（〇八二）二八二ー四八二三

千年に一度でしょうか、人類の思想のわくぐみをくつがえす、そういう人が世に出現するようです。仏教の歴史のなかでは法然聖人という方こそ、そのような方でした。聖人は、罪の軽重によって救われるかどうかを考えていた当時の常識をくつがえし、まったく新しい精神の秩序を開かれました。今月は、その法然聖人が、有名な鎌倉武士、熊谷直実にかけられたことばを紹介しましょう。

源平合戦で活躍した熊谷直実（くまがいなおざね）は、一の谷の合戦で平敦盛を討ったエピソードで有名ですね。当時直実は、十五才の息子直家（なおいえ）とともに参陣していました。やがて一人の武将と一騎打ちとなり、組み伏せるのですが、その武将はつい先刻手傷を負った我が子直家とおなじ年頃の若者でした。ためらう直実に「はよう首をとれ！」とせまる若武者。周りは源氏の手勢が囲んでおり、助ける手だてもありません。直実は、泣く泣く敦盛の首をとりました。

源平合戦が終わり、ようやく平和な世が訪れたかに思われましたが、待っていたのは鎌倉武士のなかでの醜い権力闘争でした。猜疑心にかられた頼朝は次々と弟たちを手にかけ、鎌倉武士たちも、讒言によって互いを陥れあっていきました。直実も親族との土地争いに巻き込まれ、頼朝の御前で裁判になります。いくさ場では剛の者でならした直実も、裁判での陳情などは全くできません。言い返せない直実は、書類をまとめて翠簾の向うの頼朝の前に投げ入れ、そのまま鎌倉を出奔してしまうのでした。そして直実が向かった先こそ、京都の法然聖人のもとでした。

罪深い悪人でも救われる教えを法然聖人が説いているらしいと、直実はうわさを聞いていたのでしょう。聖人に会うなり、直実は凄惨な世俗の泥沼を生きてきた自らの罪深さを、赤裸々に告白したようです。黙ってお聞きになった聖人は、一言だけ仰いました。

罪の軽重をいはず、ただ念仏だにも申せば
往生するなり、別の様なし。

罪の軽重は問題ではない、ただ念仏して往生する、そのほか何もない。—その一言に直実は、「手足をきり、命を捨てるならば救われるとこそ、言われると思っていました…」と、さめざめとして泣いたと伝わります。実際、直実は刀を研いでから法然聖人を訪ねており、文字どおり命がけであったようです。

ここで大事なことは、聖人は「命を捨てなくてもよい」と言われたのではないということです。ただ念仏して救われるほかないという聖人の言葉は、裏返せば、「たとえ手足を切り、命を捨てようとも、凡夫のはからいでは往生できない」ことを示していました。

法然聖人の一言は、直実が生きている〝常識〟という思想のわくぐみを、まさしく根底からくつがえしたのでしょう。直実の告白はたしかに、多くの命を奪ってきた自らの罪業への深い懺悔でした。しかし「手足を切り、命を捨ててこそ…」という考えには、なお、自分のものさしで罪の軽重や救いの有無を計れる、という〝おごり〟がみえます。しかし罪の軽重を問わず、ただ念仏を勧める聖人の言葉は、手のつけようもないわが身の愚かさと、その身をかねて見通されている如来の大悲を、直実に知らしめたのでした。だからこそ直実は、さめざめと泣いたのですね。

わたしたちはいつの世も、分かったように善悪を語り、それによって仏さまの救いすら沙汰します。しかし、わたしはいったい何を分かっているのでしょう。法然聖人は、凡夫のはからいを捨て、仏さまのはからいを仰ぐべきことを示してくださいました。ともにお念仏いただきましょう。わたしの視野を完全にこえて〝いのち〟を包みきる、仏さまのまなざしを仰がせていただきましょう。